ゲイ「の」男性性？ゲイ「による」男性性？

林　　正　浩

1　問題の所在

本稿の目的は、ゲイ男性に注目する形で「複数の男性性論」およびその後の進展を概観したうえで、ゲイと男性性に言及した先行研究をレビューし、その現在地を把握することである。そうした作業を通して本稿は、先行研究で用いられている「ゲイの男性性（gay masculinities）」というタームには、じつは「ゲイ『の』男性性（masculinities of gay men）」と「ゲイ『による』男性性実践（masculinities enacted by gay men）」という2つの議論[1]が混在しており、混乱をもたらしていると指摘する。本稿では、両者の複雑な関係性を解きほぐしたうえで、その混乱を乗り越えるために、両者を束ねる「ゲイの男性性（gay masculinities）」という語にかわって、「ゲイと男・女性性（gay and masculinities/ femininities）」という語の使用を提案する。

性倒錯の認識的枠組みが近代で「発明」されてから、ゲイ男性は「男の体に女の魂が宿る男らしくない」存在として理解されてきた。そうした偏見に対して当然ゲイ男性側は自画像を社会に提示しようと、様々なアクションをとってきた。たとえば、アメリカのホモファイル運動では、ゲイ男性が自らの男性性を主張し、「異性愛男性とかわらず『男らしい』ゲイ像を普及させ」ることを目指したといわれる（森山 2019: 124）。1970年代からみられる「マッチョ・ゲイ」[2]のスタイルもまた、ゲイ男性が性倒錯の認識的枠組みに反抗するために、伝統的な男性的エートスを受け入れ、自らの男性性を主張する動きとして捉えられる（Levine 1998）。ゲイの立場から偏見と闘っていく理論を確立しようとするゲイ・スタディーズも、ないとされる「ゲイの男性性」について思考してきた。このように、「ゲイに男性性はない」と社会に否定されるとき、ゲイ男性たちは「ないとされるもの」を証

---

[1] 実際そうした表記は英語圏には見受けられないが、混合されたこの2つの議論を仮に英語で表現する場合、「masculinities of gay men」と「masculinities enacted by gay men」になるだろう。

[2]「ゲイ・マッチョ」や「クローン・ゲイ」という言い方も存在する。河口（2004: 143）によれば、それは「主にNYのグリニッジ・ヴィレッジ周辺でみられたゲイ男性のスタイルであり、ジムで鍛えた筋肉質な体にレザーなどを着込み、肉体に張り付きその肉体を強調する（カウボーイか労働者風を装う）ジーンズを穿き、短髪に髭という特徴をもつ」という。

明しようと、「ゲイの男性性」というものに苦心してきた。こうした思考・運動の営みは、後続の男性／男性性研究にも影響を与えたように見受けられる。実際、男性／男性性研究の基本的視座を確立したRaewyn Connell（[1995]2005=2022）の「複数の男性性論」でも、ゲイ男性が度々取り上げられ、ゲイ解放運動に関する言及も多い。

しかし、本稿ではこれから示すように、ゲイと男性性に関する先行研究をたどると、「ゲイ『の』男性性」に関する議論（以降、議論Aと表記する）と、「ゲイ『による』男性性実践」に関する議論（以降、議論Bと表記する）が混在しており、複雑な関係性にあることがわかる。この2つの議論は、同一視してもいいようにみえるが、実はかなり異なる。議論Aとは、ゲイに男性性があるかないかを見極める議論である。そこでは、ある特定の男性性の様態をゲイの所有物として捉え、ゲイをひとつの有徴の集団／カテゴリーとして捉える傾向がみられる。さらに、「ゲイ『の』男性性」という問いは根本的に、それ自体を「異性愛男性の男性性」の参照物として位置づけており、男性性を異性愛男性が所有する特権的なものであると暗に前提していることも合わせて指摘しておきたい。それに対して議論Bとは、ゲイによるジェンダー実践を検討する議論（ゲイは男性性をどう実践するのか）である。この議論ではゲイが主語であるため、ゲイの経験とエージェンシーが強調される傾向にある。このように、この2つの議論の背後には、異なる問題意識と立場性がみえてくる。

しかし先行研究では、この2つの議論はほとんど区別されておらず、また両者が含意する前提も明確に意識されないまま、ゲイと男性性について言及するさいに「ゲイの男性性（gay masculinities）」という語が使われてきた。これは混乱を招く表現である。なぜなら、ゲイによるジェンダー実践に関する議論が、ゲイの特徴や本質に関する議論にすり替えられかねないからである。加えて、議論Aの背後に潜む異性愛中心主義的な前提そのものが、温存されてしまう危険性がある。強調しておきたいが、筆者は、この2つの議論が共存していること自体を問題として捉えていないが、両者が区別されずに「ゲイの男性性（gay masculinities）」という言葉で一括りにされ、「ゲイ『による』男性性実践」の議論が後景化されることが問題だと考えている。こうした区別は単なる瑣末事ではなく、研究の前提そのものに関わり、その研究成果が社会に与えうるインパクトまでも方向づける、非常に重要な論点である。

本稿はそうした混乱を解消するために、これまでのゲイと男性性に言及した先行研究を、議論Aと議論Bとを区別しながら整理しなおす。次節ではまず、森山（2019）論文と河口（2004）論文を題材に、改めて議論Aと議論Bの違いについて説明する。第3節では、英語圏における「複数の男性性論」と近年の議論の進展において、ゲイがどのように言及

されてきたかを概観する。第4節では、男性性に言及した海外と日本のゲイ研究を検討する。それらを踏まえて最後に、議論Aと議論Bの課題を指摘し、両者の混同を乗り越えるための一案――「ゲイと男・女性性」――を提示する。

2　議論Aと議論Bの相違

森山（2019）は、異性愛男性との関連のなかでしかゲイが語られないという状況に違和感を覚え、「ゲイの男性性」に言及した重要文献から、「ゲイ固有の男性性」がみられるかどうかを検討しようとした。しかし、この異性愛中心主義の社会でゲイの居場所がなく、「ゲイに固有の『男らしさ』は『ゲイらしさ』に回収され、……ゲイが保持する男性性は『一般的な』男性性に回収される」ため、「ゲイ固有の男性性」への言及が困難であると森山（2019: 125）は結論づける。他方で、「ゲイ固有の男性性」を確立したいかという問いに対して、森山（2019）は否定的な答えを出しながらも、「『ゲイの男性性』をそれ固有のものとして取り出したいと願うのは、むしろ取り出されたそれ（のたとえば性差別性）を批判し放擲したいからにほかならない」と述べ、「問いに満ちた要素として『ゲイの男性性』は捉えられるべきである」というスタンスを示した（森山 2019: 125）。つまり森山（2019）は、ゲイ固有の男性性を確立する必要は必ずしもないと認識しつつも、かといって議論A自体が完全に放棄されていいというわけではないとも理解する。他方、「ゲイの男性性」をゲイ固有のものとして確立する場合、それは、みつからないとされるゲイ固有の男性性を可視化させた上で批判するための戦略である。言い換えれば、本質主義的な考え方を支持しているわけではないが、ゲイの本質を論じること、特定することを禁止してもいないという複雑な立場・戦略――筆者の理解だが、議論Aをあくまでマクロの諸問題（たとえば、ゲイ男性と異性愛男性の非対称的な力関係）を浮かびあがらせるために、暫定的に「本質」として据え置く――がここで打ち出されている。しかし、この戦略では、まず「ゲイ固有の男性性」を立ち上がらせる必要があり、森山（2019）自身も述べているように、それが現行の異性愛中心主義社会では困難であるために、議論が屈折して堂々巡りになってしまっている。また、森山論文（2019）では、本質主義を擁護するという意図が読み取れないが、「ゲイ固有の男性性」へのこだわりという発想自体が本質主義を補強してしまうリスクがあるといわざるをえない。

これに対して河口（2004）論文では、本稿のいう「ゲイ『による』男性性実践」という言い方はなされていないが、実質議論Bについて論じられている。河口（2004: 148-9）は、「ゲイの『男性性』について取り上げてきたが、ここにいたっても『男性性』や『女性性』

といったものが一体何（どのような内実）を指しているのかわからないのも確かだ（そのような内実を設定すること自体問題でもあるのかもしれないが）」と述べ、男性性を「仮想的」なものとして捉え、仮想が「『現実』を作り上げる潜勢力」に注目すべきだと提案する。つまり、河口（2004）は構築主義的な考え方に依拠し、女性性と男性性の内実は虚構だが、それらによってゲイの「現実」が構築されるというのである。ゲイによる実践が女性性と男性性に絡めとられながら繰り広げられていくという意味で、前出の河口（2004）による指摘を議論Bとして読み替えても差し支えないだろう。しかし、前掲の引用部分からわかるように、河口（2004: 148）は明確に「そのような内実を設定すること自体問題でもあるのかもしれない」と述べているものの、「ゲイの男性性」という言い方が散見され、議論Bが議論Aに混同されており、「ゲイ『の』男性性」をひとつのカテゴリーとして立ち上がらせようとする考え方に影響されているといえる。

以上のように、森山（2019）は議論Aに関心を寄せているのに対し、河口（2004）は議論Bを重要視している。とはいえ、議論Bを前面にだした河口（2004）論文においても、議論Aの考え方は完全に棄却されておらず、議論Aと議論Bが混在していることがみてとれる。次節ではこうした議論Aと議論Bの関係を念頭に置き、英語圏での議論を確認したい。なお、本稿の冒頭で触れたように、英語圏ではゲイと男性性に言及するさい、「gay masculinities」と表記されることが多く、それには明らかに「複数の男性性論」の影響があるといえる。そのため本稿ではまずその議論の確認から論を進めていきたい。

3 「複数の男性性論」における議論Aと議論B

3-1　理論の祖型

オーストラリアの社会学者Connell（[1995]2005=2022）は著書『マスキュリニティーズ』[3]において、一枚岩だと考えられていた男性性に複数性をみいだし、男女間の権力関係のみならず、男性／男性性間の力関係をも明らかにした。その理論によって、男性／男性性研究（men's/ masculinities studies）は体系化を遂げた。現にこの理論は、男性性理論のキャノンとして世界各国で輸入されており、理論が提出されてから30年が経った今日においても、批判はあちらこちらで提起されているものの、議論の改善が施され、男性／男性性研究のパラダイムとしてありつづけている。本項ではConnell（[1995]2005=2022）を手が

[3] 第一版は1995年に書かれ、第二版は2005に出版された。2022年に刊行された日本語訳は第二版に基づいている。なお本稿では冗長になるのを避け、本書からの引用はページ数のみを表記することとする。

かりに「複数の男性性論」を概観し、わけても、ゲイがどのように言及されたかにフォーカスする。

まず、男性性の定義について、Connell（92）は従来の本質主義的・実証主義的・記号論的な定義を退け、次のように述べる。

> 一つの対象としての男性性を定義しようと試みるよりも（生来的な性質のタイプだとか、行動上の平均や、一つの規範などとしてよりも）、私たちは男性と女性とが過ごすジェンダー化された生活を通じた諸過程と関係性に焦点を当てる必要がある。「男性性」は、ある程度までのことではあるが、簡単にこう定義できる。すなわち、それは、ジェンダー関係における場（place）であると同時に、男性と女性がそうした場に関わることを通じた実践（practices）でもあり、さらにこれらの実践の身体体験やパーソナリティおよび文化の中での諸結果（effects）でもあるのだと。

ここからわかるように、Connell は男性性を捉えるさい、なによりも方法論的関係主義（ここからは「関係論」と略して表記する）[4] と社会構築主義を重要視している。男性性は「生来的な性質」ではなく、人々が「ジェンダー化された生活」を生きる過程において、様々な関係性によって変動しうるものだと主張される。それだけでなく、Connell（93-4）は「社会的実践の構造としてのジェンダー」を強調し、男性性を「ジェンダー実践の布置連関」、つまり「実践を配置する過程」あるいは「実践の組織化」として捉える。端的にいえば、「男性性の創出過程が、直接的な社会的関係によってだけではなく、全体としてのジェンダー秩序のパターンによっても構造化される」（306）。以上から確認できるように、Connell は、「〇〇の男性性」という所有格のような考え方（議論 A）を拒否していることがわかる。男性性は場と実践の結果として捉えられているため、Connell（[1995]2005=2022）においては議論 B こそが核心であるといえる。

こうした男性性の定義は、男性性の複数形につながる。なぜなら、現実には無数の社会空間と、そこにおける無数の実践や結果がありうるからである。そして、Connell は「一種類以上の男性性を認識することは最初の一歩にすぎない。私たちは、それらの間の関係

---

[4] 人は独立して存在するのではなく、他者との関わりあいの中で調整し、社会生活を送るとする立場である。具体的に Connell は「男性間のジェンダー関係に焦点を当てることは、分析におけるダイナミズムを維持するうえで必要である」（99）と述べている。つまり、男性性は、独立して存在するものではなく、ミクロレベルにおいて相互行為によって構築されるし、またマクロレベルにおいてもほかの男性性や全体のジェンダー構造と関わり合いながら構築される。ゲイと男性性を例にするならば、Connell はゲイを独立した存在として描いておらず、それが「ヘゲモニックな男性性に関与する瞬間」をも記述している（195）。

を確かめなければならない」と述べ（99）、関係論を徹底しようとした。

さて、Connell の理論がもっとも人口に膾炙するのは、おそらく男性性間の諸関係であろう。Connell は男性性間の関係を説明するにあたって、「ヘゲモニー」、「従属」、「共謀」、「周辺」という言葉を用いた（99-105）。そのうちとりわけゲイと関連があるのは、「ヘゲモニックな男性性」と「従属的男性性」である。ところが、以下に示すように、ここの部分ではじつは議論 B は徹底されておらず、議論 A に回収される傾向がみられた。

まず、「ヘゲモニックな男性性」は「ほかのものより文化的上位におかれ」るもので、「文化的理念と組織的権力がある程度合致した場合に限って、ヘゲモニーは打ち立てられやすい。……企業や、軍隊や、政府の最上位階の人たちは、それなりに説得力をもって男性性を共同で示している」と述べられている（101）。ここのヘゲモニー概念は、マルクス主義思想家の Antonio Gramsci に由来しており、権力を（上位から下位へ）一方的に捉えないところに新奇性がある。換言すれば、ヘゲモニーがヘゲモニーである所以は、人々がその支配を当面、受け入れており、なにかの合意が達成されているからである。するとまさしくここに、ヘゲモニーを弱体化する契機――ヘゲモニーのもとに置かれる人々は、ヘゲモニーに賛意を送らないようにすること――がみいだされるのである。Connell はこのヘゲモニーあるいは「ヘゲモニックな男性性」概念にかなりの重きを置いており、「ヘゲモニーの浮き沈みこそ、この本で提起している男らしさの構図の鍵となる要素なのである」とまで述べている（101）。そしてこの「ヘゲモニーの浮き沈み」を確認するには、歴史と地域が重要であると Connell は説く。

一方で「ヘゲモニックな男性性」と対照になるのは、「従属的男性性」である。これを体現する事例として Connell（102）はゲイ男性をあげており、「同性愛的な男性性は、抑圧を通じて、男性間のジェンダーのヒエラルキーの最下部におかれる」と述べている。もちろん、ゲイ男性が唯一の例ではなく、時に「異性愛男性や少年もまた正当性の範疇から締め出される」ことがある（103）。この「従属的男性性」概念について、Connell（[1995] 2005=2022）では詳しく述べられておらず、操作的な判断基準も示されていない。その代わりに Connell は数多くの女性性を形容する言葉（たとえばいくじなしや弱虫など）を引き合いにだした。であれば、ひとまず「従属的男性性」を、男性性から締め出されると同時に、女性性がみいだされることとして理解して差し支えないだろう。こうした特徴からわかるように、ゲイはここでひとつの有徴の集団として想定されており、議論 A の影が確認される。

しかし、こうした女性性への近接はあくまで家父長的イデオロギーによるものであり、Connell の意図するところではない。では、Connell は議論 A を完全に棄却したかといえば、

答えはノーである。実際「ゲイの男性性」（Connell は「同性愛の男性性」という言い方をしている）について、Connell は経験的な研究を通して、家父長的イデオロギーと異なる形で記述している（第 6 章）。そうした目的から考えれば、第 6 章は議論 B（ゲイ男性による男性性実践の記述）こそが中心となるはずだが、実際は議論 B を通して議論 A（「ゲイ『の』男性性」）が論じられるというややこしい展開を第 6 章がとっている。シドニーのゲイ・コミュニティに関わる 8 人の男性にインタビューを行い、Connell は「ほとんどの人が男性のように行動している」と述べ、インタビュイーのことを「とてもストレートなゲイ」[5] と表現した（225-6）。森山（2019: 120）の言葉を借りれば、Connell は「ゲイの男性性」の一形態を取り上げながらも、「ゲイに固有の『男らしさ』について記述」していない。Connell はむしろ、ゲイが男らしくないといわれることと、異性愛男性の男らしさ（との親和性）を記述している。したがって森山（2019）はこの第 6 章を、ゲイ男性がいかに異性愛男性と大差がなく、男性性を有することの記述として翻訳する。一方で Connell は、ゲイ男性の派手な爪、看護に従事する、女性との友愛をつくりだすなどの例をだし、ゲイ男性の異性愛男性と異なる側面をも描きだしている。ここからわかるように、Connell は「ゲイ『の』男性性」をひとつの矛盾――前提とされる「ヘゲモニックな男性性」に接近しつつも逸脱している――として提示している。

そのため、「ゲイ『の』男性性」も両義的な側面を有している。たとえば Connell は第 9 章第 4 節で、「ゲイ『の』男性性」を「ヘゲモニックな男性性に対抗する対案」[6] として位置づけながらも（296）、「ジェンダーに対するラディカルな挑戦は、ゲイのコミュニティライフあるいはゲイポリティクスの主流にはならなかった」と述べ、西欧におけるゲイリベレーションの保守化を批判した（298）。ここから読み取れるように、「ヘゲモニックな男性性」に対抗する（集団的な）もの[7] としての「ゲイ『の』男性性」というものに、Connell は期待を寄せていた。しかしまさにその期待により、（異性愛との対比のなかで）ゲイが有徴性のある集団として立ち上げられる。それによって、議論 A が呼び戻され、議論 B が議論 A を確立したり、論評したりするための「証拠」と化すのである。

---

[5] ストレートというのは、主に「異性愛者」という意味で使われる言葉である。Connell（222）では（インタビュイーとなるゲイ男性の態度は、）「フェミニズムについての無知のレベルは、インタビューした異性愛男性がフェミニズムに関してもっとも共通して示す見方と一致するものだ」といい、ゲイ男性と異性愛男性の類似性を提示した。

[6] 似たような記述は第 6 章でも述べられている。ゲイ男性が「ヘゲモニックな男性性を侵害して」おり、「非政治的にみえる外見」においても「ヘゲモニックな男性性に対する公的なオルタナティブが、すでに安定して存在している」という（225-6）。

[7] 小口（2024: 128）がレビューするように、Connell は「対抗ヘゲモニー的な実践は集団的になされる必要があるとする」。なぜなら、「家父長制社会において、対抗ヘゲモニー的な投企や男性たちの感情的なジレンマは『ひとり個人のレベルでは解決されないものなのだ』からである」。

3-2　その後の理論的展開

冒頭で触れたように、「複数の男性性論」は提起されてから批判されながら発展してきた。しかし残念なことに、こうした議論Aと議論Bのもつれは、「複数の男性性論」の発展とともに解消されたようにみえるが、それはじつは議論Bの後景化によるものである。本項では、「複数の男性性論」が提示された後のいくつかの進展、わけても近年「新しい展開」と評される概念を取り上げ、議論Aと議論Bの状況を確認する。そのためにはまず、「複数の男性性論」が提出された後の状況を説明する。

既述したように、「複数の男性性論」は元来、ゲイポリティクスとゲイ・スタディーズの影響を受けている。それだけでなく、「複数の男性性論」はクィア理論とも親和性がみいだされる。たとえば前出の「ヘゲモニックな男性性」概念は、Connell（[1995]2005=2022）以降、その誤解されやすさを解消すべく、家父長制の正当性を担保し、「不平等なジェンダー関係を正当化する男性性」として理解されるべきだと再定式化されるようになった（Messerschmidt 2018）。これは、クィア理論の礎を築いたEve Kosofsky Sedgwick（1985=2001）からできあがった「ホモソーシャリティ」概念と共鳴している。なぜならホモソーシャリティもまた、「男性が他の男性との友情や親密な協働を通して、ジェンダー秩序や家父長制を維持・擁護する仕組みや社会的力学」として定義されているからである（Hammarén & Johansson 2020: 213）。そして、1990年代以降のクィア理論を牽引してきたJudith Halberstam（1998: 2）が『Female Masculinity（女の男性性）』[8]で、「男性性が白人・中産階級・男性の身体から離れたとき、そしてその場所」と指摘して以来、男性性は「男性」、もしくは男性トイレなどの「男性空間」の専売特許ではなくなり、あらゆる主体と空間にみいだされるようになったのである。換言すれば、「ゲイ『の』男性性」という問い立て自体はもはや成り立たない。なぜなら、それをゲイ、あるいはゲイタウンの所有物だといえる確証がないわけで、後述する「ハイブリッドな男性性」があるように、ゲイ的とされる実践は、異性愛男性にもみいだせるからである。クィア理論はこのように、本質主義と親和性の高い議論Aを拒絶し、カテゴリーの不安定性に注目する傾向がある。また、Halberstam（1998）の知見を踏まえれば、ゲイと男性性という研究テーマがもっぱらゲイ研究によって担われている現状さえも問題として提起でき、多様な立場やバックグラウンドをもつ研究者がそこに参入すべきだという含みが読み取れる。実際、Connell（[1995]2005=2022）以降における英語圏の男性／男性性研究では、海妻（2019: 48-9）が紹介するように、「必ずしも当事者主義は重視されておらず、むしろフェミニズムやクィア・

[8] この本の詳細については松田（2021）による書評論文を参照されたい。

スタディーズなどとの理論的・人的交叉を前提とし、親フェミニズムであることを学問としての自己規定に含める『CSMM（Critical Studies on Men and Masculinities ／男性（性）批判研究）』が、盛んである」。

こうしたジェンダー実践の複雑化・多様化は、近年の男性／男性性研究においても注目されている。たとえば「ハイブリッドな男性性」と「包摂的男性性」という概念があり、中でも「ハイブリッドな男性性」は「男性／男性性の社会学の新展開」として打ち出されている。この２つの概念は主に異性愛男性などの「特権的な男性」による男性性実践を記述するためのものだが、ゲイとも深く関連する。以下に示すように、ここでは、異性愛男性によるジェンダー実践が「ゲイ『の』男性性」（議論 A）を必要とする／作り出すということ、そして議論 B の不在が読み取れる。

Tristan Bridges & C. J. Pascoe（2014=2024: 55-6）によれば、「ハイブリッドな男性性」とは、「特権的な男性のジェンダー・パフォーマンスやジェンダー・アイデンティティの中に、周縁化され従属的な位置におかれた様々な男性性や、常にではないが、女性性と結びついているとふつうは考えられているような要素を、選択的に取り込んでいくこと」をさし、その最たる例として、「ゲイ」や「ブラック」や「フェミニン」などの要素を断片的に取り入れる（シスジェンダーでヘテロセクシュアルの若い白人）男性による実践があげられるという。言い換えれば、「ハイブリッドな男性性」では、じつは議論 A を予め措定し[9]、「自己」を安定させるために、「他者」との差異を生成・利用しているのである。異性愛男性は「ゲイ」や「フェミニン」などを「自己」にない要素だと捉えないかぎり、「他者」から取り入れようとはしないだろう。この「ハイブリッドな男性性」について、Bridges & Pascoe（2014）は懐疑的な診断を下しており、それはジェンダーとセクシュアリティにおける不平等を根本的に翻すのではなく、むしろ不平等なシステムを再生産するものと懸念している。実際 Tristan Bridges & Kendall Ota（2019）はのちに、「ハイブリッドな男性性」を「ハイブリッド・ヘゲモニックな男性性」に改めようと提案している。

しかしここでは、議論 B が抜け落ちている。Connell のいう「とてもストレートなゲイ」にオマージュを捧げ、Bridges（2014）が「とてもゲイなストレート」というように、「ハイブリッドな男性性」は主に異性愛男性による男性性実践を記述するための概念である。ゲイ男性による「ハイブリッドな男性性」実践に関する検討は、管見の限り、LI（2025）が取り上げた「ゲイ・イクメン」以外に見当たらない。しかし、もし「ヘゲモニックな男

---

[9]「ゲイ『の』男性性」だけでなく、たとえば「黒人の男性性」といったような、ほかのマイノリティ集団の男性性もまた措定されてしまう。

性性」を Messerschmidt（2018）が再定式化したように、「不平等なジェンダー関係を正当化する男性性」として理解するならば、当然ゲイ男性もまたそれに賛意を送り、「ハイブリッド・（ヘゲモニック）な男性性」を実践しうる存在である。

他方で、「ハイブリッドな男性性」と似た概念として、「包摂的男性性」も提起されている。その提唱者である Eric Anderson（2009）によれば、北米と西欧ではホモヒステリア（「性的指向が同性愛であると周囲に思われること」を恐れる心理状態をいう）が低下するにつれ、大学生世代の男性たちは、それを前提としない、より柔らかな男性性――ほかの男性と情緒的につながり、女性的・ゲイ的な行動を受け入れる傾向がみられる――を実践しているという。事例として、Eric Anderson & Mark McCormack（2016: 6）はかつて差別用語の「That's so gay（それめっちゃゲイやん）」を取り上げ、それは若年層の間では必ずしも差別的意味として受け止められているとは限らないという。そのため「包摂的男性性」においては、ゲイ的なこと（たとえばファッションや言動など）が排斥されるどころか、むしろ好意的に包摂されるという。かくして Anderson（2009）は「包摂的男性性」をジェンダーとセクシュアリティにおける不平等に挑戦／抵抗するものとして位置づけるが、Anderson & McCormack（2016: 3）では「潜在的なホモフォビアや異性愛規範が依然として存続し、引き続き否定的な影響を及ぼしていること」を認め、さらに注意深くみせかけ上の平等になっていないかを観察するべきだという。

「ハイブリッド・（ヘゲモニック）な男性性」にしても、「包摂的男性性」にしても、いずれも異性愛主義に立脚する「ヘゲモニックな男性性」の（表面上の）変化を物語っている。英語圏では 1980 年代から 1990 年代にかけて、アイデンティティ・ポリティクスを代表例とする「承認の政治」の興隆により、性的マイノリティの文化的承認／誤認の是正が進められており、異性愛を特権視する家父長的イデオロギーに基づく従来の「統治術」に変更がますます迫られている。そうした背景のもとで、「ヘゲモニックな男性性」が引き続き優勢を保つには、ゲイなどの周縁においやられたカテゴリーの要素を恣意的に取り込み、ソフトな「覇権」へと切り替えることが要請される。またゲイ男性の中には、たとえばホモファイル運動のような、規範的な男性性 (10) に迎合的な人も存在する。こうした迎合は、4-1 で述べるネオリベラルな性政治や価値観と高い親和性をもつ。このようにジェンダー実践が複雑化し多様化している背景のもとで、ある特定の男性性の様態を誰かのものとし

(10) Messerschmidt（2018）によれば、「ドミナントな男性性」と「ヘゲモニックな男性性」は一致する場合もあれば、そうではない場合もある（詳細は平山（2024: 13）を参照されたい）。ゲイ男性が具体的に「ヘゲモニックな男性性」に賛意を送っているのか、それとも単に「ドミナントな男性性」を実践しているのか、ケースバイケースで検討する必要がある。本稿は、両者を使い分けないことで曖昧さをあえて残しつつ、「規範的な男性性」と表記している。

て決めつけることは不可能である。なぜなら、それを証明するすべがないからである。まさしく河口（2003: 53）が指摘するように、「異性愛という規範を生成するために同性愛を構成的外部として位置づける」ことがここでなされており、つまり「ゲイ『の』男性性」は一種の後付けとして捉えられる。よって、「ゲイ『の』男性性」たるものを措定し、議論Aを突き詰めること自体が、（異性愛と同性愛との）差異を固定化し、異性愛規範の要請に順応しているとすらいえるのである。

3-3　小括

ここまでは「複数の男性性論」とその延長線上の議論の読解を通して、Connell（[1995] 2005=2022）では議論Aと議論Bが混在し、議論Bが議論Aを打ち立てるためにある側面を示した。一方で「複数の男性性論の新展開」とされる近年の議論においては、異性愛男性のジェンダー実践が議論Aに依存し、議論Bが後景化されてしまったことが確認される。

3-1で確認したように、Connellは、著書の序盤から男性性を「ジェンダー実践の布置連関」と定義することで、男性性を特定の集団の所有物とする考え方（議論A）を退けた。しかし、たとえば第6章――インタビュー調査を通してゲイがどのように「ヘゲモニックな男性性」と関わってきたか、彼らのジェンダー実践を明らかにしようとした部分（議論B）――のように、ゲイ男性を対象とした経験的研究では結局のところ、特定の男性性の様態・特徴をゲイという集団のものとして立ち上がらせている（議論A）。つまり、Connellは力点を男性性階層間のダイナミクスの分析に置き、男性性が特定の時空間の下での一形態にすぎないと認識していながらも、階層間・集団間――「異性愛男性」と「ゲイ男性」、「ヘゲモニックな男性性」と「従属的男性性」――の比較のために、議論Aをふたたび呼び戻さざるをえなかったのである。

他方、「複数の男性性論」ののち、「ハイブリッドな男性性」と「包摂的男性性」、特権的な男性性が周縁的な男性性を恣意的に取り込む実践を表す概念が新たに提起された。こうした概念は、異性愛男性によるジェンダー実践は、じつは周縁的なものに依存していることを暴いた。そこでは、男性性実践に関する議論がより前面に出されるように思われるが、異性愛男性のみに焦点が当てられ、ゲイもまたそうした男性性を実践しうること（議論B）は見落とされた。

4　ゲイ研究における男性性の扱われ方

では、ゲイに焦点をあててきたゲイ研究、とりわけ経験的研究において、男性性がどのように言及されてきたのか。本節ではこれから示すように、ゲイ研究では議論 B、つまり、ゲイ男性による男性性実践に関する検討がメインを占める。わけても、ゲイ男性が規範的な男性性によってどう規定され、あるいは規範的な男性性をどう作り替えるかに関する探究が多くみられた。

4-1　英語圏の研究

まず、早い段階で「複数の男性性論」をゲイ研究で応用した研究として、Peter Nardi ed.（2000）があげられる。『Gay Masculinities』と題された編著では、「ゲイが異性愛男性とは異なるタイプの男性性を表現する」という Connell から示唆された指摘を前提とし、現代のアメリカにおいて、「ゲイ男性が実際に男性性をどのように実践し、規範的とされる男性性にどのように関与し、それに異議を唱え、そしてそれをどう変化させているのか」という問いが探究されている（Nardi ed. 2000: 1,7）。つまり、ここでは議論 A、「ゲイ『の』男性性」の存在を前提に、議論 B が検討されている。計 12 章からなるこの本では、ゲイと男性性について実に多様な論点が提示された。ここではこれらの論点すべてを仔細に取り上げることは紙幅の都合で不可能だが、総じていえば以下の研究が行われた。すなわち、① 対人関係におけるゲイと男性性に関する研究と、② ジェンダーの視点にとらわれないゲイと男性性に関する研究である。たとえば ① について、この本ではゲイ男性同士の性愛関係、ゲイ男性と異性愛男性の友情関係、ゲイとフェミニズムとの連帯関係などが取り上げられている。そして ② では、男性性と信条や階層やエスニシティなどの変数との関連も検討された。

このほか、多彩なゲイ・カルチャーにも研究関心が集められている。しかし Nardi ed.（2000）のように、異性愛男性の男性性との相違点に重きを置くのと対照的に、ゲイが「ヘゲモニックな男性性」を参照せざるをえない側面を強調する研究が多く登場するようになった。いうなれば、「ヘゲモニックな男性性」の再生産がますますゲイ研究でも問題化されるようになったのである。こうした研究群では、ゲイ男性による数多くの男性性実践が取り上げられており、議論 B への関心の高さが伺える。たとえばゲイの出会い文化では、ゲイと自認していない男性はしばしば「男らしい」や「能動的な性役割を担う」と表象され（Downing & Schrimshaw 2014）、ゲイ男性も自らの男性性を強調するために異性愛男性のような話し方を遂行する（Sarson 2020）。ゲイポルノに出演する男性はしばし

ば、発達した筋肉、タトゥーと大きなペニスをもち、伝統的な男性性を連想させる（Burke 2016）。またゲイ・シーン[11]においては、自己表現を通して多様な男性性が可視化されるが、男性性のパフォーマンスが依然として重要である。それが成功すれば（ゲイ・シーンでの）受容が促されるが、価値が低くみなされる男性性を示す者はより困難に直面しやすいといわれる（Ridge & Plummer & Peasley 2006）。ここに、パフォーマンスを通して男性性が能力化される事態がみられており、それは完全競争を謳うネオリベラルな価値観と親和性をもつものである。さらに市井レベルでは、「有害な男性性（toxic masculinity）」概念が援用され、それがいかにゲイ本人のみならず、ゲイ・コミュニティもしくはクィア・スペース全体にも悪影響を及ぼすかを説くインターネット記事もみられるようになった（Mega 2022）。このように、ゲイ男性が「ヘゲモニックな男性性」のオルタナティブとなりうるという Connell の初期の指摘を批判的に発展させ、より高い解像度をもって、ゲイによる文化と実践に「ヘゲモニックな男性性」がどれほど深く根をおろしているのかが示されてきた。

さらに、ゲイによる男性性実践（議論 B）を規範的な男性性といったジェンダー内部の変数のみならず、ほかの変数と結びつける研究もある。本稿では取り上げられていないが、Connell（[1995]2005=2022）は男性性階層間の「周辺化／権威化」の関係を論じるさいに、人種という変数を導入している。それゆえ、ジェンダーのみならず、ほかの変数と連動して男性性を考察すること自体は男性／男性性研究の「伝統」であるといえる。そうした検討は、本項の冒頭に触れた Nardi ed.（2000）でもなされた。他方、近年の潮流としては、ジェンダー秩序が新自由主義によって再編される中で、男性性と新自由主義との関連が注目されている。たとえば Lisa Duggan（2003）は男性性そのものには触れていないが、ゲイポリティクスが新自由主義と結託していると指摘する。ゲイ男性の関心事が私的領域へと向かい、彼らの主張も異性愛規範を脅かさないものへとトーンダウンしていく。そうした状況を Duggan（2003）は「新しいホモノーマティヴィティ」と名付けて診断する。それは、性的マイノリティのコミュニティ内部でも深刻な格差をもたらすものである。ゲイ男性は往々にしてその経済的有用性をもって（「素敵な感性の持ち主」や「消費の達人」として）メインストリーム社会に受容され、他方でほかの性的マイノリティは可視化されにくい。ゲイ・コミュニティ内部でも、中産階級で、洗練されたファッションを消費できる男性が多く注目されるという傾向がある。こうしたことを踏まえれば、前出の「マッチョ・ゲイ」のような、規範的な男性性と高い親和性をもち、メインストリーム社会でも違和感

[11] ゲイ向けの商業的空間をいう。たとえばナイトクラブやダンスパーティーなどがあげられる。

をもたれないようなゲイ男性による男性性実践を単に「伝統的な男性的エートスの受容」や「性倒錯の認識的枠組みに対する反抗」として捉えることはもはやできない。それは、新自由主義への順応でもある。なぜなら、Ridge, Plummer & Peasley（2006）のいう、男性性のパフォーマンスに成功したゲイ男性がゲイ・シーンで受け入れられやすく、価値の低い男性性を示す者が困難に見舞われるというゲイ・コミュニティ内部の格差と序列がまさしく新自由主義体制と「新しいホモノーマティヴィティ」に呼応しているからである。こうした状況を女性性の視点から捉えようとした研究として、Shirley Xue Chen & Akane Kanai（2021）がある。それによると、主に若い白人女性が消費するインスタグラム上の美容文化では、一部のゲイの美容系インフルエンサーは莫大な人気を博しているという。彼らは男性性ではなく女性性、それも新自由主義･ポストフェミニズム的な価値観――「本物」の美と自分らしさは、個人の選択によって達成される――を内包したものを演出するという。しかし彼らの成功は、あくまでも白人や中産階級や男性などの属性が重なり有利に働いた結果にすぎず、マイノリティが正当に評価されるようになったことを示すものではない。Chen & Kanai（2021）は、クィア女性が忘れ去られ、性的マイノリティと女性を覆う構造的不平等が後景化されるという事態が起きているとし、批判している。

4-2　日本を対象とした研究

日本を対象とした研究の現状としては、ゲイと男性性に関する理論研究が僅かで、経験的研究、それも議論 B に関する研究が圧倒的に多い。そこでは、「ゲイ『の』男性性は○○である」というような言及（議論 A）がみられず、規範的な男性性（やほかの変数）の影響のもとで、ゲイ男性による多様な実践が多く取り上げられている。なお、日本のゲイ研究の中には、「男性性」もしくは「女性性」に直接的に言及していないが、ゲイと男・女性性全体の議論に示唆を与えるようなものも多数存在する（たとえば風間 2003; 金城 2010; 石田 2007; 前川 2014 など）。だが紙幅の都合で、本項では「男性性」または「女性性」に直接言及した研究のみを取り上げるとする。

日本を対象とした研究の多くは、次のような議論の流れをとっている。すなわち、ゲイの性・生に関わる男らしさの規範を指摘したうえで、ゲイ男性がそうした規範に対応する実践を記述し、そのエージェンシーを浮かび上がらせるという流れである。たとえば大島（2016: 93）では冒頭、「ライフストーリーを通じ、『男らしさ』規範が性の領域にどのような影響を及ぼしているかを分析する」と述べられ、一部の若年層のゲイ男性による「性的冒険主義」の実践が取り上げられた。それは、コンドームを着用せず、薬物を使用し、集団セックスに参加するなど、危険とされる性行動をあえてとる実践である。「男らしくない」

という理由でいじめを受けたゲイ男性が、そうした実践を通して男性性を獲得し、いじめのトラウマから回復することができた一方で、性的冒険主義により健常な身体を失い、逆説的に男らしさを喪失してしまったという。他方、近年、マッチングアプリを介したゲイの出会いにおける男性性も注目されている。石田（2019）はそうしたアプリにおける「モテ筋」はおしなべて男らしい身体であると指摘する。それを踏まえて木谷・河口（2021）では、そのような男らしさの規範に応答するために、ゲイ男性が短髪や髭や筋肉などの男らしさを連想させるような記号を身につけようとする実践が言及されている。

他方、女性性に関して、島袋（2021）は、ゲイ同士の出会いにおいて「ホゲる NG」[12]との規範を明らかにした。金子（2022: 167-8）もまたそうした規範の存在を確認し、それを「シシィフォビア」[13]と呼んだ。ただし、ゲイ男性による実践は規範通りではなく、「マッチョな男性をパートナーとして理想視」せず、男らしさをパートナーの条件としていないゲイ男性による実践も金子（2022）は記している。玉城（2021: 69）もまた規範と対峙するゲイ男性に焦点をあて、マッチョな身体は若年層のゲイ男性の間では必ずしも好まれるのではないと指摘している。

このほか、エスニシティという変数を議論 B に取り入れたのは、Thomas Baudinette である。Baudinette（2016）は、新宿二丁目が「民族化された性欲」――日本社会に広く流布する中国や韓国を後進的とみなす新植民地主義的言説と呼応する形で、日本人男性は二丁目にくる中国人や韓国人男性を日本のゲイ・サブカルチャーを脅かす存在として捉える――を正当化する空間であると批判する。Baudinette（2021）では、二丁目に通う若年層のゲイによる男性性実践の記述を通して、さらに端的に、日本におけるゲイ・コミュニティ内部の男性性の序列――「イカニモ系」などのハードな男性性を実践する男性が高く価値づけられ、そうでない者（たとえば「オヤジ系」や「デブ系」）は底辺に置かれる――を指摘している。総合的にみれば、外国人やエスニック・マイノリティのゲイは男性性階層においてもしばしば周縁的に位置づけられることが示唆される。それへの批判的応答として、Hazuki Kaneko & Diana Khor（2024）は、「民族化された性欲」の存在を認めつつも、「男性性階層どおりに欲望が喚起される」規範から逸脱した「外専」と「アジ専」[14]

---

[12]「ホゲる」とは、鹿野（2011: 64）によれば、女性性を誇張した「オカマ」のような会話や仕草をすることをさすタームであるという。

[13] 女性性嫌悪と訳され、具体的には女々しいと感じる男性に嫌悪感を抱き、性的対象から排除することがあげられる。

[14] Baudinette（2016）によれば、「外専」とは「外人専門」という意味で、わけても英語圏の白人を主に求める趣味嗜好をいう。対して「アジ専」は、Kaneko & Khor（2024: 5）によれば、日本人ゲイ男性の「アジア人への性的関心」をいう。ここでいう「アジア人」は主に日本の近隣諸国（地域）をさし、「南アジアや中央アジアは含まれない」という。

の日本人ゲイ男性による実践を取り上げた。

4-3　小括

以上のように、経験的研究では、議論Bが盛んであり、議論Aはほとんど見受けられなかった。とくに英語圏の研究では、ゲイ男性による多様な男性性実践が取り上げられ、一枚岩でないゲイ男性像が示されている。規範的な男性性のみならず、ゲイによる男性性実践は、人種、階級、宗教、障害、新自由主義などの変数からも影響を受けていると説明される。

一方で日本ではエスニシティが意識されているが、変数への注目がまだまだ不十分であり、均質的なゲイ男性像が浮かび上がっている。金子（2022: 169）が指摘するように、ゲイ・コミュニティにおける「若く、健康で、都市在住、教育を受け、中産階級、ストレートにみえる」ゲイ男性がもっぱら取り上げられ、「『フェム』な男性（“femme” guys）や、恋愛市場で周縁化されたゲイ男性」などの存在が後景化されている。そして、ゲイ・コミュニティの内部、もしくは男性同士の間に議論が集中していることも課題としてあげられる。ゲイ男性による男性性実践は、ゲイ・コミュニティ内部や男性同士の間で完結するとは考えられにくい。ほかの文脈、たとえば女性との関係においても、ゲイ男性は男性性を実践しているに違いない。Halberstam（1998）や Chen & Kanai（2021）の知見を踏まえれば、ゲイ男性は女性性を実践することもまた可能である。さらに、ゲイ男性による男性性実践を検討する議論Bでは、ゲイ男性と規範的な男性性との関係、言い換えれば、「ヘゲモニー／従属」や「規範的／非規範的」といった二項対立に主軸が置かれていることも課題として考えられる。それによって、ゲイ男性による実践がどのように複数の変数を横断するかは見落とされるだけでなく、「ヘゲモニー／従属」や「規範的／非規範的」では捉えられないような実践も看過されかねない。

最後に、「経験的研究では、議論Bが盛んであり、議論Aがあまり見当たらなかった」という現象についても考えたい。これは即座に、議論Aと議論Bのもつれが解きほぐされたことを意味するものではない。経験的研究では、その性質上、一般化することに限界がある。言い換えれば、経験的研究はそもそも、議論Aのような抽象度の高いものを射程内に包含すること自体が難しい。また、こうもいえるかもしれない。すなわち、経験的研究では、「ゲイ『の』男性性」（議論A）の存在を前提にしているからこそ、個別の事例を通して議論Bの検討に集中することができたと（たとえば Nardi ed.（2000）のように）。

5　考察

以上のように、先行研究では議論Aと議論Bという2つの議論が混在し、それらは明確に区別されないまま、研究が重ねられてきた。より正確にいうと、ゲイと男性性に関する理論研究において、両者の混在が顕著である。そこでは、議論Bが議論Aを打ち立てるために存在する場合もあれば、議論Aと議論Bが同居しながらも議論Bが後景化される状況も確認される。他方、ゲイと男性性に関する経験的研究では、議論Bが盛んである一方で、議論Aはほとんど見受けられなかった。しかし、それは議論Aと議論Bのもつれが解消されたとはいえず、議論Aを前提とするからこそ議論Bが検討できるという可能性も念頭に置く必要があるだろう。

改めて整理すると、議論Aと議論Bはそれぞれ、次のような課題を抱えている。議論Aにおいては、森山（2019）が指摘するように、異性愛中心主義の社会で「ゲイ『の』男性性」のありかを特定するのは至難の業である。実際、「ハイブリッドな男性性」や「包摂的男性性」がゲイに結びつけられる要素を取り込んだり、ゲイも規範的な男性性に親和性を示したりするなど、両者の男性性は共通する部分も少なくない。したがって、ある特定の男性性の様態が備わったからといって「○○の男性性」に分類し、それをなにかの権力関係と直結させることはできない。それを「ゲイ『の』男性性の本質」や「ゲイ固有の男性性」として措定することはなおさら不可能である。

森山（2019）でもこうした屈折と困難が意識されたと思われるが、本稿は森山（2019）よりさらに進んで、「ゲイ『の』男性性」を問い立てること自体が異性愛規範の要請であると喝破する。男性性実践の複雑化・多様化を含意する「ハイブリッドな男性性」や「包摂的男性性」概念が示すように、異性愛規範の維持・再生産には、ゲイに結びつけられる要素または「ゲイ『の』男性性」（議論A）などのゲイの有徴性を措定することが必要である。「ゲイ『の』男性性」というのは、まさしく権力の中心にいる人々が構築し、必要とする概念である。異性愛中心主義の社会でゲイが「男性」、もしくは「男性性を有する者」として名乗るには、そうした議論を一旦受け入れなくてはならないが、「ゲイ『の』男性性」に固執すると、男性性に対して持ちうるゲイ男性の政治的可能性がかえって限界づけられてしまう。つまり「ゲイ『の』男性性」は、Duggan（2003）が批判したように、新自由主義に懐柔されてしまい、異性愛規範などの既存の構造を脅かさないどころか、補強するものへと変質してしまう危険性がある。

他方、議論Bは、ゲイ男性が男性性をどのように実践するかを問い、ゲイの経験を重要視する。しかし、「ゲイが規範的な男性性に絡めとられながらも、それを作り替える」と

いう「複数の男性性論」から得られた理論的前提の下で、ゲイ男性と規範的な男性性との力関係のみに関心が払われており、その問題関心に直結しないゲイによる男・女性性実践は見えにくい。また日本を対象とした研究の場合、均質的なゲイ男性像のみが前景化されてしまっており、障害の有無や階級や年齢などの交差の中で男性性がどう実践されるのかが今後の課題として残っている。

さらに問題をややこしくしているのは、議論Aと議論Bはそれぞれ異なる議論であるにもかかわらず、先行研究では両者が使い分けられていない点である。それにより、「ゲイの男性性（gay masculinities）」というフレームワークで知が蓄積されていき、議論B（実践）が議論A（本質）に吸収されている現状がある。

では、どうすればよいだろうか。本稿は、「ゲイの男性性（gay masculinities）」という語のかわりに、「ゲイと男・女性性」という言い方を提案する。繰り返しになるが、本稿は、議論Aと議論Bを区別することこそを主張するものの、それらを切り離したいと考えているわけではない。その意味で、「ゲイと男・女性性」は、Connell（[1995] 2005=2022）で強調された関係論を継承しつつ、議論Aと議論Bを包括し、かつ、どちらの議論にも還元されないことを意識したタームである。「ゲイと男・女性性」という議論において着目したいことは、関係性を中心に据え、ゲイと多様な主体／空間との関係性、ならびにゲイ内部にある多様な関係性を取り上げて、そこに立ち上がってくる男・女性性を考察することである。また、そのように着目する利点として、特定の男・女性性の様態をゲイ「の」ものとして措定してしまう危険性を回避できることがあげられる。それにより、ゲイと規範的な男性性の力関係という単一変数のみならず、今後さらに多様な変数（人種、階層、空間など）との相互作用に関する検討を議論の俎上にのせることが可能となる。さらに、「支配／抵抗」や「規範的／非規範的」という軸では十分に捉えられないような実践もまた可視化できるのではないだろうか。

6　おわりに

本稿では、男性／男性性研究とゲイ研究において、それぞれゲイと男性性がいかに言及されてきたかを概観し、議論Aと議論Bがもつ複雑な関係を指摘した。そして、そのどちらも課題を抱えており、議論Aが異性愛規範に利用されたり、議論Bが議論Aに還元されたりすり替えられたりするといった問題点も明らかになった。これに対して、本稿では、議論Aと議論Bの区別を強調したうえで、両者を包括し、そのどちらも捨象しないものとして、「ゲイと男・女性性」という言い方を提案する。

改めて強調するが、「ゲイと男・女性性」は、「ゲイ『の』男性性」への記述および価値判断を排除するものではない。むしろ、異性愛規範に立ち向かい、当事者のアイデンティティを確立するさいに、「ゲイ『の』男性性」が必要とされる場面もあるだろう[15]。しかし他方、「ハイブリッドな男性性」が記述しようとする特権的な男性による男性性実践からわかるように、異性愛規範／異性愛者の「構成的外部」の確立に、「ゲイ『の』男性性」というものが一役を買っている側面も否めない。竹村（2001: 221）が指摘するように、「異性愛主義をおびやかす最大の脅威は、じつは同性愛者ではなく、異性愛者と自認している者が自分自身の非異性愛の可能性に気づくとき」で、つまり「異性愛者の『同一性の原理』」が脅かされたときである。したがって、「ゲイ『の』男性性」や「ゲイ『による』男性性実践」といった、ゲイそのものに主眼を置く考え方より、「ゲイと男・女性性」というような、ゲイを取り巻く複数の文脈やゲイを囲い込む複数の変数などに着目した考え方のほうが、はるかに政治的可能性を有しているのではないだろうか。

参考文献

Anderson, Eric, 2009, *Inclusive Masculinity: The Changing Nature of Masculinities*, New York: Routledge.

Anderson, Eric & McCormack, Mark, 2016, “Inclusive Masculinity Theory: overview, reflection and refinement,” *Journal of Gender Studies*, 27(5): 547-561.

Baudinette, Thomas, 2016, “Ethnosexual Frontiers in Queer Tokyo: the Production of Racialised Desire in Japan,” *Japan Forum*, 28(4): 465-485.

——, 2021, *Regimes of desire: young gay men, media, and masculinity in Tokyo*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Bridges, Tristan, 2014, “A Very ’Gay’ Straight?: Hybrid Masculinities, Sexual Aesthetics, and the Changing Relationship between Masculinity and Homophobias,” *Gender and Society*, 28(1): 58-82.

Bridges, Tristan & Pascoe, C. J., 2014, “Hybrid Masculinities: New Directions in the Sociology of Men and Masculinities,” *Sociology Compass*, 8(3): 246-258.（下地ローレンス吉孝訳, 2024,「ハイブリッドな男性性——男たちと複数の男性性に関する社会学の新しい方向性」平山亮, 佐藤文香, 兼子歩編『男性学基本論文集』勁草書房.）

Bridges, Tristan & Ota, Kendall, 2019, “”Sprinkle some Gay on My Straight”: Hybrid Hegemonic Masculinities in a Post-Gay Era,” James Dean, Nancy Fischer ed., *Routledge International Handbook of Heterosexualities Studies*, London: Routledge, 274-285.

Burke, Nathaniel B, 2016, “Hegemonic Masculinity at Work in the Gay Adult Film Industry,” *Sexualities*, 19(5-6): 587-607.

Chen, Shirley Xue & Kanai, Akane, 2021, “Authenticity, Uniqueness and Talent: Gay Male Beauty Influencers in Post-Queer, Postfeminist Instagram Beauty Culture,” *European Journal of*

[15]「ゲイ『の』男性性」の意義は、異性愛規範が措定する有徴的で、ゲイ男性のみにみいだされる男性性を特定できた点にあるのではなく、ゲイ男性の主体形成に一助を果たしうる点にある。異性愛規範に基づく規範的な男性性と異なる形で、男性性が構築・実践されうること、換言すれば、頑なに異性愛規範にすがる「男性性」を脱中心化することにこそ意義がある。

Cultural Studies, 25(1): 97-116.
Connell, Raewyn, [1995]2005, *Masculinities*: 2nd ed., Berkeley: University of California Press.（伊藤公雄訳，2022，『マスキュリニティーズ——男性性の社会科学』新曜社.）
Downing, Martin J, & Schrimshaw, Eric, 2014, "Self-Presentation, Desired Partner Characteristics, and Sexual Behavior Preferences in Online Personal Advertisements of Men Seeking Non-Gay-Identified Men," *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, 1(1): 30-39.
Duggan, Lisa, 2003, *The Twilight of Equality?: Neoliberalism, Cultural Politics, and the Attack on Democracy*, Boston: Beacon Press.
Halberstam, Judith, 1998, *Female Masculinity*, Durham: Duke University Press.
Hammarén, Nils & Johansson, Thomas, 2020, "The Transformation of Homosociality," Lucas Gottzén, Ulf Mellström, Tamara Shefer ed., *Routledge International Handbook of Masculinity Studies*, London: Routledge, 213-222.
平山亮, 2024,「男性性役割の社会化から、男性性による不平等の正当化へ」平山亮, 佐藤文香, 兼子歩編『男性学基本論文集』勁草書房, 1-18.
石田仁, 2007,「ゲイに共感する女性たち」『ユリイカ』39(7): 47-55.
——, 2019,「東京・新宿のゲイ・シーンにおける出会いと『多様性』」,『BL が開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社, 151-169.
海妻径子, 2019,「親フェミニズム的に聴き取り大衆的に運動する——米国・英語圏男性性研究と日本男性学の研究動向比較からみる男性性変革運動の課題」『国際ジェンダー学会誌』17: 48-67.
金子初輝, 2022,「日本のゲイ男性における親密性とシシィフォビアに関する一考察——出会い系アプリの使用経験から」『年報カルチュラル・スタディーズ』10: 149-170.
Kaneko, Hazuki & Khor, Diana, 2024, "Doubly Marginalized?: Japanese Gay Men with Interracial desires," *Sexualities* 0(0).
鹿野由行, 2011,「『運命の物語』と計算された親密さ——ゲイの出会いのツールの変化と合コンの流行」『大阪大学日本学報』(30): 47-66.
河口和也, 2003,『クィア・スタディーズ』岩波書店.
——, 2004,「『男性性』という矛盾——男性同性愛の視点から」『情況 . 第三期』5(10): 140-149.
風間孝, 2003,「介入の場としてのゲイ・ポルノグラフィ」『女性学』10(0): 8-29.
金城克哉, 2010,「『掘ってくれるタチいないっすか？』——沖縄県の出会い系掲示板投稿文の計量的分析」『論叢クィア』(3): 39-61.
木谷幸広, 河口和也, 2021,「マッチングアプリ『9monsters ナインモンスターズ』におけるゲイの身体変容——リアル・スペース「ゲイバー」への影響」『広島修大論集』61(2): 1-17.
Levine, Martin P., 1998, *Gay Macho: the Life and Death of the Homosexual Clone*, New York: NYU Press.
LI HUIFENG, 2025,「Understanding Fatherhood and Masculinities: The Case of Gay Men via Surrogacy in Urban China」第 98 回日本社会学会大会報告原稿.
前川直哉, 2014,「1970 年代における男性同性愛者と異性婚——『薔薇族』の読者投稿から」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会.
松田康介, 2021,「二重に棄却されるジェンダー——J. ハルバースタム『女の男性性』」『教育・社会・文化：研究紀要』(21): 37-48.
Mega, Hugo, 2022, "How Gay Men Are Endorsing Toxic Masculinity without Knowing!," KET Magazine,（Retrieved August 15, 2025, https://ket.brussels/2022/04/30/how-toxic-masculinity-has-become-evermore-present-in-the-gay-community/）.
Messerschmidt, James, 2018, *Hegemonic Masculinity: Formulation, Reformulation, and Amplification*, Lanham: Rowman & Littlefield Pub.
森山至貴, 2019,「ないことにされる、でもあってほしくない——『ゲイの男性性』をめぐって」『現代思想』47(2): 117-126.
Nardi, Peter ed., 2000, *Gay Masculinities*, Thousand Oaks: Sage Publications.
小口藍子, 2024,「＜書評＞レイウィン・コンネル著／伊藤公雄訳（新曜社、2022 年）マスキュリニティーズ——男性性の社会科学」『ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』(27): 128-129.
大島岳, 2016,「『性的冒険主義』を生きる——若年ゲイ男性のライフストーリーにみる男らしさ規範と性」『新社会学研究』1: 93-118.

Ridge, Damien & Plummer, David & Peasley, David, 2006, “Remaking the Masculine Self and Coping in the Liminal World of the Gay ‘Scene’,” *Culture, Health & Sexuality*, 8(6): 501-514.
Sarson, Charlie, 2020, “‘Hey Man, How’s u?’: Masculine Speech and Straight-Acting Gay Men Online,” *Journal of Gender Studies*, 29(8): 897-910.
Sedgwick, Eve Kosofsky, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press.（上原早苗, 亀澤美由紀訳, 2001,『男同士の絆――イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会.）
島袋海理, 2021,「恋愛からの疎外、恋愛への疎外――同性愛者の問題経験にみるもう一つの生きづらさ」『現代思想』49(10): 31-38.
竹村和子, 2001,「『資本主義社会はもはや異性愛主義を必要としていないのか』――『同一性の原理』をめぐってバトラーとフレイザーが言わなかったこと」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 213-253.
玉城寿樹, 2021,「同性愛男性の身体」『人文×社会』1(4): 55-77.

（りん　じぇんがお・博士後期課程）